深淵の追悼歌

田村狸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
深淵の追悼歌

【Ｎコード】
Ｎ００３８ＢＡ

【作者名】
田村狸

【あらすじ】
騎士オルグラムはある日公爵家の庭で美しい乙女に出会う。二人は次第に惹かれあっていくが、彼女は狂気の淵にあった。
やがて騎士は彼女を運命から救い出すため駆け落ちを試みる・・・

〔残酷な描写あり〕のタグは保険です。

レクイエム

死したる人は暗き混沌の深淵を渡り、理と混沌の女神の膝元へとたどり着くのだという。

それならば、お前は死んでいるのか。

抱きしめた体は温かいのに、お前の瞳は私のことを映さない。

お前の精神は混沌の深淵の中にある。俺はおろかその血を分けた息子のことまで放って、一人遠く暗いところへ行ってしまった。

胸に耳を照れば鼓動が響き、口付けは熱を帯びているというのに、
喘ぐと息はこんなにも狂おしいというのに。
話しかければときに笑い、あるには歌を口ずさむ、

お前の瞳はしかし現を映していない。お前の耳は私の言葉を聞いていない。お前が耳を傾けるのは、ただ気まぐれな神の睦言だけ。

二度と戻れぬところへ駆け去って行こうとしている、お前は死者なのか。

本当に死んでしまったのか。その微笑みはかつてあった生の残滓に過ぎないのか。それとも…まだ生きているのか。そして今まさに死に行こうとしているのか。

緩慢に、湖に浮いた櫂のない小船のように、さまようように岸から離れて、二度と戻れぬところへ、永遠を誓ったはずの俺を置いて・・・

それとも。

すべては俺の独りよがりな思い込みだったのだろうか。
あなたは最初から、俺の事など見ていなかったのではないか。葦が風に吹かれるままにそよぐように、あなたは俺の情熱に吹かれていただけで、そこには愛など無く、ただ為すがままであったに過ぎないのではないか。

だとしたら。

・・・あなたをころしてもいいだろうか。

葦のように私の愛になびいたのと同じく、俺の殺意のままになびいて、あなたを殺し、その後で後を追ってもかまわないだろうか。死者が渡る深淵に、もしも俺が追いつくことができたら。あなたが見つめている場所に立つことが出来たら、

あなたは今度こそ俺のことを見つめてくれるだろうか。

・・・・・・ああ、本当は知っていた。そんなことできはしないと。
俺がためらっている間に、あなたのその温かい身体に、あなたが生

きているのだとだまされている隙に、あなたの精神はもうずっと遠くに行ってしまった。

ようやくあなたの肉体が後を追ったときには、俺が気付いたときには、もう追いつけないほどに離れてしまったのだ。今頃きっとあなたは、もう理と混沌の女神の膝元にいるだろう。

わっかっている。
それはあなたの優しさだと。
あなたの幼い息子を置いて俺があなたの後を追っていかないように。
私をあきらめさせるために。この世につなぎとめるために。

・・・・・・わかっていたんだ。
あなたはこんなにも優しくて残酷な人なのだと、そう、初めて会ったあの日からずっと。

クロージア、最愛の女。
――――――――あなたを愛した事を後悔しない。

出会い

はじめて彼女と出会ったのは、１８のときだった。ようやく見習いの衣を脱ぎ捨てて、騎士の剣を腰に帯びることを許された俺は、褐色の髪をゆるく編み、瞳の紺に合わせた一張羅の服を着て、我が家の主君たる子爵ともども魔王の襲撃を避けてイリューシン公爵の城へ非難されてきた国王陛下の護衛のため、エフカール城に逗留していた。

生まれ育った荘園とはあまりに違うその華やかな眺めに我を忘れた俺は、好奇心の命じるままに夜の庭へとさ迷い出て、そこで彼女を見た。

あれは六月の夜。覚えている。白いバラが一面に咲いていた。噎せ返るような香りの中、少女は静かに佇んでいた。白い肌はバラの花弁よりなお白く、月光に照らされてほのかに輝く銀の髪は、滝のように腰まで流れ落ちていた。薄紫色のドレスに縫いつけられた輝石はその息遣いに合わせてかすかに瞬き、憂いを帯びた瞳が天でもなく地でもなく、どこか遠い俺には見えない何かを見つめていた。その美しさに俺は息を飲み、次いで衝撃を受けたことを恥ずかしく思って、粋がった若者そのものの口調で話しかけたのだ。

「こんな夜更にあなたのような美しい人がたった一人でいらっしゃるなんて」

たぶん声はうわずっていたと思う。彼女ははっとしたようにこちらを振り向いた。困ったような口調で、あいまいに微笑んだ。

「こんな夜更けくらいにしか、一人にはなれないのです」

遠まわしな拒絶の言葉に俺は思わずたじろいだ。けれど、どうしても立ち去ることは出来なかったのだ。騎士として女性を夜中に一人で置いていうことなどできなかったからではなく、背を向けたと単に彼女が消えてしまいそうに見えたので。

「じゃあ、私は今夜一晩案山子です。人間でなければ、あなたは一人なのと同じでしょう。あなたがご満足なさるまで、私はここでカラスを見張っていましょう」

拒否されるかと思ったが、かえって来た言葉は予想外だった。

「かかし・・・？かかしって何ですの？」

「畑に立てる人形のことです。作物を荒らす動物がそれを人間だと思って近寄らないようにするための」

俺はしどろもどろになって答えながらはっとした。馬鹿だな。相手は見るからに良家の姫ではないか。たぶん公爵家の縁者なんだろう。案山子なんて知るわけがない。自分が酷く田舎ものになった気がして顔が熱くなった。気持ちを切り替えようと他の話題を探す。

「その・・・姫はここで何をなさっていたのですか」

「深淵の歌声を聞いていたのです。人が沢山居る所だと、うまく聞こえないのです」

「深淵の・・・？」

冗談を言っているようには聞こえず、俺はぞっとした。

深淵は生と死の間に横たわる暗きふちであり、天地創造以前からの永久の混沌が渦巻く場所。生ある人の訪れることは出来ない理と混沌の女神が支配する世界だ。人がそこを覗き込めば、心を取り込まれて戻ってこられなくなる。

混沌の中には神々の知恵が宿り、その叡智を読み取ろうと自ら身を投じる神官もいるというが・・・。そうして狂気に陥った人の話は何度か聞いたことがあった。

俺は何か問いかけたいと思ったが、何も口にすることができなかった。そのことは触れてはいけないように思われたのだ。場を持たせようと代わりの話題を探すが、思いつかなかった。侍女は何処ですかとか、あなたはどなたですかとか、後から考えれば言うべきことは山ほどあったはずだ。しかし、慣れない宮廷言葉に四苦八苦していたせいもあったのだろうか。そのときの俺はただ呆けたように突っ立っていて、彼女もまた何も話しかけようとはしなかった。

俺たちは互いに無言でしばらく見詰め合っていたが、やがて姫君は軽く会釈をすると、背を向け歩き出す。

このまま行かせたらもう二度と会えないにちがいない。

とっさに口を開いた。

「あの、姫君。案山子をお持ちいたします」

「え？」

乙女は怪訝な顔で振り向いた。

「口で話すだけではどんなものかご想像がつきにくいでしょうから。あの、もしよかったら。あ、ええと、姫君は、よくこちらに来られるのですか？ここにお持ちしても、その・・・」

しどろもどろの言葉に、彼女は薬と笑みを漏らした。春の日差しのようなやさしさに息を呑む。

「私の名はクロージア。イリューシン公爵の長女ですわ。ここは私の庭。よく散歩いたしますの。この時間でよろしければいらっしゃって、騎士殿」

公女。同じ貴族とはいえ、田舎の荘園騎士の次男坊と公爵の娘では、天と地ほどに身分が違う。どっと冷たい汗が噴出した。

「・・・公女様とは露知らずご無礼を」

「気にしておりませんわ。それと、私のことはクロージアと。この薔薇園は聖域。世俗の身分も争いも及ばぬ所です。あなたの名前を教えて下さる？」

気にするな、と言いながらもクロージアと呼べと言う彼女の言葉には命令に慣れた者特有の有無を言わせぬ響きがあった。俺は片足を引いて腰を折ると、動揺を表に出さぬよう、出来うる限り正確に騎士の名乗りの作法をなぞった。

「我が名はオルグラム＝イルアス＝ファン・オリアン、ザハーリンの荘園を預かるケネス＝ジルクルディア＝ファン・オリアンの次男でございます。公じ・・・クロージア様」

「案山子、楽しみにしているわ。オルグラム」

それが私とクロージアの出会いだった。

＊　＊　＊

相手は公女。迷いながらも結局、翌日の夜再び訪れた俺に、彼女は少し驚いたように見えた。また来いと言ったのは単なる社交辞令だったのかと俺は不安になったが、クロージアは柔らかく微笑むと、案山子を持ってきてくれたのかと尋ねた。

「それが・・・誠に申し訳ないのですが、もって来られなかったのです。その、大きいものですので、途中で見張りの兵にとがめられてしまいました」

「まあ、大丈夫でしたの」

「ええ。しかし、練兵用の的と間違えられてしまいまして、持っていかれてしまいました。今頃は槍でつつかれていることでしょう」

俺は姫君にお見せするために昨夜徹夜で案山子を着飾ったのだ。恥ずかしいのを我慢して買ったレースやリボンで彩られた案山子だが、その芸術性を理解して頂く機会はついに訪れなかった。

「そうでしたの。あなたが無事でしたら、別にかまいませんわ。実は私もあの後、父に案山子とはどんなものなのか聞いてみたのです。

そうしたら、父が持ってきて下さったのです。これであっているのか、持って来たのですけれども」

クロージアは上着の隠しから小さな人形を取り出した。十字に組んだ木を中心にして、麦藁帽子をかぶった様は確かに案山子だ。正直イリューシン公爵閣下がそのようなものをご存知であったとは以外だ。しかしこの案山子、藁細工だが恐ろしい顔が描かれ、胸には釘が刺さっている。

「こうして地面に刺すのですわね」

「ええ、そ、そうですが。この釘は？」

「父が、遠い東の王国には呪いの藁人形と五寸釘と言う風習があるらしいと。それから、案山子は領地を脅かすもの共から守るものだと聞いたと仰っていて。アーノルファンなど地獄に落ちてしまえ、と釘を打たれたそうです」

俺は遠目から見たことのあるいかにも冷徹そうな公爵の顔を思い出して妙な気分に陥った。何かいろいろ間違っている気がした。確かに案山子は藁で作られることも多くて、畑（領地）を守るための物なのだが。案山子が排除するのはカラスや猪であって、政敵を排除するために案山子に釘を打ったりはしない。だが、子の珍妙な代物を前に、俺は会ったときの緊張を忘れていた。

「さようですか。して、斯様な物を何処から手に入れられたのですか」

「領民の献上品です。城の裏手の木に括り付けているところを見つけたそうです。そのものの家族は処刑されたそうですが、横暴な夫から解放してくれてありがとう、と感謝の印なのでしょうね。近隣でも評判の悪い男だったそうですから。騎士が近づいたら恥ずかしがって逃げてしまったそうですが」

誤解ではないか、と思った。が、言えばその妻の身が危ういのだろうし。…と言うか、あれは案山子じゃなかったんじゃいか。まあ、余計なことは言わないで置こう。案山子の使用法についても、やんごとなき人々の風習はまた違うものなのかも知れない。俺は無視することに決めた。

「イリューシン公爵は、面白いお方のようですね」

「そうでしょう。私父が大好きなんですの。父は・・・」

突然クロージアは言葉を切ると、心ここにあらずといった態で立ちすくんだ。瞳は何かに気をとられたようにじっと一点を凝視している。しかし、その視線を追いかけても何も見つけることは出来なかった。

「クロージア様？姫？いかがなさったのですか。どこかお加減でも」

何度か呼びかけると、彼女ははっとしたように振り向いた。その顔は月光の下でも少し青ざめているのが判った。

「クロージア様」

「大丈夫です。少しぼうっとしていました。それで、何を話していましたっけ」

「あなたの父君の事を。しかし、今日はもうお休みくださいませ。お顔の色がよろしくありません」

「お気遣いありがとうございます。確かに、少し疲れたみたいです。今日はあなたのおかげで楽しいときを過ごせましたわ」

クロージアは力なく笑うと、ドレスの裾を優雅につまんで背を向けた。

去り行く彼女の後姿を、俺はただ見守るしか無かった。

秘め事

そのころ、魔王が我が国を脅かしてはいたが、実際にその危機が迫っていたのははるかに南のことで、警備とは名ばかりに大してすることも無いまま、俺は連日彼女と会った庭に通うようになっていた。

彼女はほぼ毎日この庭を訪れているようだった。彼女は最初若干ぎこちなかったが、だんだん私にいろいろな事を話してくれるようになった。俺も次第に、公爵家の姫を前にしているという緊張感が薄れ、一人の友人として、そして女性として彼女を見るようになっていった。

会話は大体たわいも無いことだったが、その中で彼女の公爵家での立場が語られることはなかった。

クロージア。俺はその名前を聞いたことがなかった。イリューシン公に姫君があられることは知っていたが、彼女は社交界に出るどころか姿を現すことも無い。掌中の珠である美しい姫君を公爵は人目にさらすのを嫌がっているとか、逆に病がちだとか気狂いであるとの噂もあるが、とにかくその存在は適齢期にあるにもかかわらず謎に包まれていた。

だがそのときの俺は、クロージアのその美しい姿を見て、おそらく公爵が溺愛して男の目から隠しているのだと単純に納得していた。

その彼女は、本来ならば直接言葉を交わすことも出来ないような人だ。ましてや、二人きりで夜に会うなど。けれど、どちらもそうした事を口にも態度にも表さなかった。確かにこの薔薇園は一種の

聖域だったのだ。それがたとえ仮初の物であれ、身分からも、性別や情欲からも解き放たれた場所。そう、あの時までは。

＊　＊　＊

ある日俺は、思い切って前々から気になっていたことを口にした。

「姫君は、深淵の響きが聞こえるのですか」

「ええ、オルグラム殿。小さいころからそうでした」

「聞きたいと・・・わざわざ聞きたいと思われるのですか」

「はい。深淵は・・・混沌の海は私のことを呼んでいるのです」

「もしかして、あなたが偶に、心ここにあらずと言った様子を見せることと、何か関係があるのですか」

「はい」

ひゅっ、と息を飲む。

それは俺が恐れていることだった。

彼女は偶に呼びかけても反応しなくなることがあって、そんな時は決まってどこか別の世界を見ているような近寄りがたい空気を身にまとっていた。それでも、今までは大抵何度か呼べば正気に返っていたのだが、ここ何日か、前よりも現実を見失う頻度が増え、戻ってくるのにも時間がかるようになっていた。

そのことが示す答え、それは迫り来る悲劇を予感させた。

「――――あなたは、まさか『深遠をのぞむ者』になるつもりではありませんよね？それがどういう意味を持つか分かっているのですか」

俺には自ら人生を放棄するような選択をする気持ちなど、到底信じられなかった。しかし彼女は、一縷の望みをあっさりと否定した。

「ええ。そのつもりです。呼び声は日増しに強くなっています。それに抗う心は私にはありません。もっと早くにお話しするべきだったのでしょうが。そんな顔をなさらないで」

俺はたぶん泣きそうな顔をしていたのだと思う。このあと何度もそうするのと同じように。

「抗う気力がないと？あなたにとって、この世はそんなに住み心地の悪いものなのですか。混沌のかけらを抱いて生まれてきても、全員が『深淵をのぞむ者』となるわけではないと聞いておりますが」

世界にはもともと店も地も光も闇もなく、ただ混沌が広がっていたのだと言う。そこに理と混沌を司る女神が降り立ち、秩序を与えた。混沌を材料に私たちの住む世界を作ったのだ。だからこの世のすべては混沌に与えられたかりそめの姿。万物は、死ぬとその魂が混沌の海に還る。そしてそこですべての記憶や執着が解けると、再び練り直され新しい魂となる。新しい魂は混沌の海の中心にある光の道を通ってこの世界に新しく生まれ出でるのだ。

しかし、極まれに魂の中心に形を成しきらなかった「混沌のかけら」を抱いたまま生まれてくる者がある。そうしたものは「混沌のかけら」が混沌の海に還ろうとするのに引きずられ、惹きつけられる。彼らは生きていながら混沌の海が広がる深淵の声を聞き、覗き見ることさえ可能なのだと言う。

混沌の海はあらゆる物の始まりであり終わり。すべてを支配する女神の領域。そこには、大きな知恵が眠っている。そのため混沌の海を見、声を聞くものは預言を行う聖職者として『深淵をのぞむ者』と呼ばれる。

しかし、深淵は死者の還るところ。本来生者が関わってよいものではない。『深淵をのぞむ者』は、混沌の海で智を得るたびに、代わりにこの世の記憶を失っていく。そしてまた、長く混沌に触れるほどにその魂は混沌に溶けていき、だんだんと正気を失い、最後には魂だけが先に輪廻の輪に還り抜け殻となってしまう。そのため、『深淵をのぞむ者』は生きながら半分死者であるといわれる。

彼らが混沌に魅かれるのは仕方のないことだ。でも、「混沌のかけら」を抱いて生まれてきたものがすべて『深淵をのぞむ者』として正気を失うわけではない。呼び声に抗って世俗で普通に生活し、天寿を全うする人だって沢山いる。もっとも、呼び声の強さは人により様々だとも言うが。
彼女が『深淵をのぞむ者』になるなど考えたくなかった。

「よくご存知でいらっしゃいますのね。確かにすべての人が『深淵をのぞむ者』となるわけではありません。儀式を経て、その精神すべてで混沌に「潜る」ことをしなければ、あるいは正気を保てる時間は長くなるのでしょう。
でも、私を呼ぶ声はとても強く、あなたがお気づきの通り、すでにこの身は彼方の声に・・・光景に囚われているのです。いまさら抗おうとは思えません」

「どうして。公爵閣下は――――ご家族やご友人のことはどうでもいいのですか。あなたはなぜ・・・」

「両親は、覚悟しています。不思議に思われたことはございませんか。どうして私が社交界に姿を現せるのか、こんなに毎日侍女も連れずに、庭に下りて密会などすることが出来るのか」

「それは・・・、あなたを溺愛して人目にさらしたくないからだと」

薔薇園のことは俺も不思議に思ってはいたが、自宅なのだからどうにでもなるのだろうくらいにしか思ってはいなかった。

「人目にさらしたくないのは事実でしょうね。私は偶に、奇行をとりますから。ああ、誤解なさらないで。両親は私を愛してくれていますわ。社交界が私の精神の負担となることを気遣ってくださっているのです。それに、私の自由を尊重してくださっているのですわ」

クロージアはそう言っていたずらっぽく方目をつぶって見せたが、強がっているようにしか見えなかった。

「私の中の混沌はとても強力なものです。自ら神官となる道を選ばなくても、そう長く生きることはできないかもしれません。ゆっくりと、築かぬままに狂っていくことが怖いのです。お父様やお母様に、その姿を見せたくない・・・。それくらいなら、いっそ神殿で世の役に立ちたいと思うのです。それに・・・」

彼女は日と臣を伏せて、咲き初めの薔薇の花びらを撫でた。そのはかなげな姿に、唐突にいとしさと怒りがこみ上げた。今まで心の奥に押し込めていた感情が奔流となって押し寄せて、気付いたときには、俺は後ろからクロージアを抱きしめていた。

クロージアが驚きに身体をこわばらせる。かすかなあえぎ声と、二つの鼓動が重なって夜の闇に溶けた。

「クロージア、あなたは間違っている」

「・・・オルグラム、何を・・・？放しなさい」

我に返ったクロージアが腕をもぎ離そうとした。腕に力をこめる。

「いやです。もし緩やかに狂気に陥る姿を見せたくないから神殿へ行くなどというのが理由ならば、あなたは間違っている。私は・・・いえ俺は、あなたのご両親は、一日も長くあなたに傍に居て欲しいんです。たとえいつかは狂気に陥るとしても、それまで一日も長く。狂い始めても・・・少なくとも俺はあなたの傍に居たい。いや、向こう側になんて行かせない様に、全力で引き止めて見せます。あなたは、クロージア様はあなたを愛する人たちの事を見くびっています」

「オルグラム？」

クロージアは抵抗をやめると、俺のほうへ首をめぐらせた。青灰色の瞳が見開かれている。

「クロージア様・・・俺はあなたが・・・好きです・・・」

言ってしまった。なんという身の程知らずなことを。頭の奥で理

性がうめき声を上げた。しかし、熱情に浮かされた心は留まるところを知らなかった。いったん離したクロージアを温度は前から抱きしめると、強引に首を傾け口付ける。柔らかな感触が唇に当たった。

どん、と胸を叩かれ、クロージアが拘束から逃れた。急に冷たくなった腕に、遠ざかっていた理性が舞い戻る。俺は大地にがばと跪いた。

「クロージア様。ご、ご無礼を致しました。この非礼、お望みなら我が命であがないます。でも、でもどうか、重ねての無礼を申し上げますが、『深淵をのぞむ者』のことはお考え直し下さいませんか」

「・・・あなたの命をとるつもりはありません。無礼だとも思いませんでした。私も、望んでいたことです。ただ驚いただけで」

小声だった。だが、聞き間違えではなく確かに聞こえたのだ。

――――――――――私も、望んでいたことです――――――――――

「クロージア様？今のお言葉は」

問い返す間もなく、クロージアは駆け去っていった。その後姿を、私はなすすべもなく見送った。

真意を聞きたい。俺はそう思ったが、それから何日たっても、彼女があの薔薇園に姿を見せることはなかった。

＊　＊　＊

思えば、ここは彼女の庭だというのに俺はいつも見送る側だったような気がする。クロージアは、本当に、いつも後ろ姿ばかりが記憶に残る女だった。その最期でさえ、追いつかれるのを拒むがごとく、一人俺に背を向けて行ってしまったのだ。

儚げなのに、あれはなかなか強情だった。

そういうところは本当にあの子によく似ている。

ルド公子（前書き）

誤字脱字報告大歓迎です。
無理して軽い会話を入れようとしたら酷いことに・・・

ルド公子

クロージアに関する二つの噂が城内に広まりだしたのは、あの日から一月ほど後のことである。一つは、神殿に新しい『深淵をのぞむ者』迎えられるらしく、それがイリューシン公爵家縁の者であるであること。もう一つは王国6公爵家の一つルド公爵家の次男からイリューシン公爵家に向けて縁談の申し入れがあるらしいことだった。どちらもあいまいなものであるが、この二つの相反する噂に俺は混乱させられた。

イリューシン縁の『深淵をのぞむ者』候補者はクロージアのことで間違いないだろう。だが、神殿に入るならば、結婚は出来ない。さりとて、ルド公爵家ほどの家が、いかなイリューシン公爵家とは言えど、たとえ次男でも分家との縁組を結ぶようには思えなかったのだ。

クロージアの存在自体はあまり有名ではなく、彼女が「混沌のかけら」を有していることは更に知られては居ないが、イリューシン公爵家に姫が二人居ること自体は有名だ。ルド公爵家に嫁ぐのは二番目の姫かとも思われたが、彼女はすでに婚約しているとも聞く。もっともその相手は伯爵家の子息で、貴族にあってより高い家柄のものと結ぶために婚約解消が行われることは珍しくないが――――。

では、やはりクロージアは神殿へ行ってしまうのだろうか。私の説得は聞き入れてもらえなかったのだ。かといって他の男と結ばれるのと神殿へ行くの、どちらがましかと言われれば懊悩してしまいそうだが・・・いったいどちらなのか。私は気になってたまらなかった。

「おい、呼び出しだぞ」

同僚の声に私は我に帰った。

「隊長か？」

「いや。ルド公子、ニール様だ。お前知り合いだったのか。朴訥そうな顔をして隅に置けないじゃないか」

「ルド公子閣下？いや、知らない。ジュネ、何も聞いてないのか」

「ああ。ただ呼んで来いと。お前、本当に心当たりないのか。何か不始末をしたんじゃないだろうな。お前のことだから、修羅場に居合わせて余計な一言を言ったり公のか犬に変な芸を教えたり裏帳簿で鼻をかんだりそれを公の部屋のゴミ箱にうっかり捨てたりしたんじゃないかと心配だ」

「お前は俺を誤解している。何処に目をくっつけているんだ」

「私の眼球が見えないとしたら相当まずいぞ。ほら、お前たちもそ

う思うだろう」

問いかけられた同僚たちがこくこくと首を縦に振るのが見えた。

「お前ら、何でうなずくんだ。俺よりジュネの味方をするのか？」

「当然。死にそうなやつの味方をしてもうまみが無いだろ」

「おい」

「喧嘩したいならちゃんと戻ってこい。とにかく、お前はとにかく間が悪いやつだから気をつけろよ」

ジュネというこの少し年上の同僚は気遣わしげに眉を潜めた。彼は口は悪いしやたらと兄貴風を吹かせるが、心根はいい騎士だ・・・その妄想を除けばたぶん。

「大げさなやつだな。もしかしたら玉の輿の話かも知れないぞ。後で悔しがるなよジュネ」

「ぶはっ、玉の輿。まあ、ルド公子は美男らしいけど、俺は男なんざ城をもらえるったってお断りだよ」

「気色悪いことを言うな。・・・まあ、とにかく行ってみるよ。たぶんたいしたこともない使い走りだろうよ」

心配するなと軽く手を振って詰め所を後にしたが、心には暗雲が垂れ込めていた。

ルド公爵の公子、ニール。イリューシン公女の夫候補として噂されている人物だ。その男に呼び出される。

彼の縁談の相手はクロージアだったのだ、と直感した。面識もない一介の騎士が呼び出される理由というのは、彼女のこと以外に無いだろうから。私はぎりりと歯をかみ締めた。

＊　＊　＊

呼びつけられた扉の前に差し掛かるとノックをしようとしたが、そこで思いとどまった。来客中のようで話し声がする。

「――混沌のかけらを持っていると聞きますがいいのですか。妻にするのに気違いでは・・・」

「かまわん。道具と同じだ。子供さえ生めれば気が狂おうと何だろうと。あの一族は魔力が強い。特に混沌のかけらを持つものは魔術に秀でていると聞く」

「まあ、なかなか美人ではありますね」

「確かに。他に好いた男でも居るのか、嫌がってはいたが、無理矢理と言うのも悪くは無い」

何て事を。

中に居るのはルド公子と誰かに違いない。あんな男とクロージアは結婚させられそうなのか。腹が煮えくり返りそうだった。これ以上聞いていたくなくて、荒々しく扉を叩いた。

「失礼いたします、お呼びと伺いましたが」

「入れ」

豪奢に飾り立てられた応接室の中には、二人の青年が立っていた。一人は従者らしき空色のお仕着せを着ている。もう一人は金の巻き毛を背にたらした、緑の瞳の美青年だった。豪奢な服装からしても、こちらがルド公子だろう。

「これは、来客中であられたのですか。気がつかず、誠に申し訳ございません」

白々しい。そう思いながら声をかけると向こうもそう思ったのか、立ち聞きしていたのは分かっているんだぞ、とでもせせら笑うような、それでいてどこか値踏みするような視線でこちらをじろじろと眺めた。

「かまわぬ。世間話をしていただけだ。おまえには、気に食わないようだがな」

彼は従者に下がるよう手を振ると、小卓のグラスに酒を注いだ。それを手に持つと、椅子の背もたれに背を預けてにやりと笑う。

「オルグラムといったか。あの女に近づいているそうだな」

「あの女とは、クロージア様のことでしょうか。公女様に対して失

礼な言い方では」

相手が大貴族であることなどそのとき俺の頭から吹き飛んでいた。敵愾心もあらわに言い返した。

「女は女だ。私は別にあれが何を考え誰を思っているのかなどどうでも良い。ただ、両家の同盟の証として子をなせばそれでよいのだ。世間の連中はやたらとありがたがっているようだが、子の血統さえ確かならば処女かどうかも気にはしない。だが、――――単刀直入に言おう。醜聞は困るのだ。我が家は公爵家。嫁にする女に男がいるなどということは許せぬ。それは分かるだろう」

「貴方は、あの方の心などどうでもよいとおっしゃるのですか。政治上の・・・子をなすための道具に過ぎないと？」

「それ以外に何がある。あのような半分気の狂った女。ああ、声もなかなか良かったな。よがり啼くのを聞いてみたいような気はする」

「・・・貴様」

思わず低くうなると、公子はああこわい、と大げさに肩をすくめ、片方の唇を吊り上げた。

「元気のいいことだ。まこと若いとはすばらしい。どのような短慮も情熱の一言で許してもらえるなどと思い込めるのだからな。が、そのような言い方をしていいのかな。たかが騎士風情が」

そこで急に公子は笑みを納めて鋭く睨んだ。氷のような眼差し。私は思わず息を止めた。その様子を確認すると、公子はふっと視線を和らげると、先程までのいやみな笑みに戻った。

「とにかく、醜聞は困る。あれには二度と近づくな。あれは結婚するくらいなら今すぐ『深淵をのぞむ者』になるなどといって西の離宮に閉じ篭ってしまっているが・・・まったく無駄な事をする。女とは愚かだな。孕んでからなら狂おうと深淵に堕ちようと勝手だが、今は困る。おとなしくしていれば、そうだな。確かお前は次男であったか？荘園のひとつも与えてやらんでもないぞ」

「そのような取引、応じると思うのか」

怒りのあまり、声がひっくり返りそうになるのを懸命に抑えたが、もはやへりくだった宮廷言葉を話す気にはなれずにいた。

「無礼だな。まあいい。どの道お前があの女とどうこうなることは在り得ぬ。従順か、そうでないのかの違いに過ぎん。おっと、言っておくが、駆け落ちなどという馬鹿なことは考えるなよ。もっとも、そんな度胸は無さそうだがな。まあ、よく考えろ」

口を開けば取り返しのつかないことを言ってしまいそうだった。なけなしの分別で唇をかみ締め無言でいる私に対し、公子はぐいとグラスの中身をあおると顎をしゃくった。

「話は終わりだ。もう行け」

私は震えるこぶしを握り締めて無言で礼をすると、部屋を辞去した。

扉を乱暴に閉めた途端、力任せに壁を殴りつけた。見張りの兵が鋭い目つきで睨みつけてくる。それを背に感じながら回廊を歩み去り、ようやく人気の無い中庭に出ると、低くうめいてしゃがみこんだ。

何とか理性を保ったおのれを褒めるべきかけなすべきか。あの男を危うく殴り飛ばすところだった。完璧な宮廷流の発音で話される美声の、しかしねっとりと絡みつくような声音が耳について離れない。

彼はクロージアのことなど毛筋ほども考えていない。狂人であっていいと言うのも懐の広さを示すのではなく、ただ無関心なためだ。あんな男と結婚してクロージアが幸せになれるとは到底思えなかった。それくらいならいっそ

――――駆け落ちなどと馬鹿な事を考えるなよ。もっとも、そんな度胸は無さそうだがな――――

彼の言葉が耳に蘇った。そうだ。駆け落ちしてしまえばいいのだ。そのときまでクロージアは憧れではあったが、手の届く、伴侶として現実の選択肢にある存在ではなかった。しかし皮肉にも、公子の言葉は俺を決心させることになった。

後から考えたら、それは皮肉でもなんでもなかったのだが・・・。

彼女は西の離宮に居ると言っていた。もしかしたら嘘かも知れないが、作為のあるようには見えなかった。調べてみる価値はあるだろう。俺は駆け落ちに向けて、計画を練り始めた。

誘拐

夜半、俺は離宮の前に立っていた。勢いに任せて駆け落ちを決意したものの、迷いが無かったと言えば嘘になる。

我ながら薄情だとは思うが、家族のことはあまり心配していなかった。父と俺の主君である子爵は、王国6公爵のひとつウィズル公爵の遠縁にあたる。ウィズル公爵はルド公爵家とイリューシン公爵家が手を組む事を快く思わないだろう。ならばその縁談をぶち壊した配下の騎士家に対してもそう無体なまねを許すことは無いのではないか、と楽観的に捉えていたのだ。

だが、肝心のクロージアについてははなはだ自信が無かった。彼女はそもそも『深淵をのぞむ者』に惹かれている。それを止めることはなかなかに難しいように思われた。仮に出来たとしても、彼女が駆け落ちを試みるほどに俺の事を好きでいてくれる保障は何処にもない。むしろ、あの時の一言を頼りにするのは、あまりに心もとないと言えた。

それに何よりも、奇跡が起きてクロージアが駆け落ちしてくれたとして、それは彼女の幸せに繋がるのだろうか。俺は領地もない騎士の次男坊で、駆け落ちなどしてはさすがに実家に帰るわけにもいかない。公女には想像もつかない苦労をさせてしまうに違いなかった。

考えれば考えるほどに己の計画はばかげているように思えた。何度も思い留まりかけたが、そのたびに耳の奥にルド公子の声が蘇って、俺を行動に駆り立てた。

＊　＊　＊

そしてその夜、俺は離宮の前にいた。

心の底には、未だに振り切れぬ迷いがあったが、とにかくクロージアに会おう、と決めていた。心の内を話し、駆け落ちが無理でもルド公子との結婚と、『深淵をのぞむ者』になるという選択だけはどうにかやめさせるのだ。巡回の警備が去ったのを見計らうと、俺は物陰に沿って露台に近づいた。

ガシャン。何かが割れる音と共に、絹を裂くような悲鳴が上がった。

見つかったのか。背筋が凍ったが、すぐにそうではないことが分かった。曲者、邪神の徒だという言葉と共に複数の人間が争い合うような音がした。何事だろう。そちらへ近づこうとしたとき、離宮から、黒装束に身を包んだ男たちが何か白っぽい物を運んで走り出てきた。まるで人のような大きさの・・・。松明の光が当たって、男の肩に担がれた荷から銀の髪が流れ落ちるのが見えた。

あれはクロージアだ。

衝撃に混乱した頭で、おぼろげに彼らはクロージアを誘拐しようとしているのだと理解する。周囲を見渡し、この騒ぎならもうあれかが知らせに言っているはずだと予測すると、あとはもう無我夢中で男たちの後を追って走り出した。

西の離宮はその名の通り西の端に存在し、その先にはイリューシン所有の森が広がっている。男たちは迷い無くそちらへ踏み込んでいった。下草を掻き分け、足元の枯れ枝を踏み鳴らして後を追う。俺が追ってきていることは分かっているはずだが、逃げる事を最優先しているのか、反撃は無かった。

月の光に夜の森がほの青く輝いていた。しかし、その様を幻想的だと思う余裕は無かった。ただひたすらに連中に追いつこうと息を切らす。

木立を掻き分けると、前方に幾頭かの馬影が見えた。あれに乗って逃げられては追いつかない。通常なら夜の森を馬で駆けるなど狂気の沙汰だが、彼らが落馬するのに賭ける気には到底なれなかった。それに、先ほどの襲撃で俺は火の玉が飛ぶのを見た。おそらく連中の中には魔導を扱える者がいたのだ。ならば道を照らして馬を駆るなど造作も無いだろう。

馬のところへたどり着かせてはならない。その焦りのままに、俺は剣を抜いた。もしかしたら魔導師までいる集団にたった一人で切りかかるなど無謀だ。そのことは自覚していたが、頭の芯が焼ききれたようになって、行動が制御できなかった。クロージア。ただそれだけが全身を支配した。

全身の力をこめて両腕で振り下ろした剣は、鋭い金属音と共に弾かれた。肩に担がれたクロージアが驚いたように目を見張るのが視界の端に見えた。
今行くから待っていてくれ。

腕に力をこめなおし、胴を横なぎにしようと再度剣を振るいかけ

たが、横から別の男が剣を突き出してきた。咄嗟に方向転換し、辛くも鍔で受け止めれば、ジンと腕に痺れが走った。そこへ火球が掠めた。褐色の髪の毛が幾筋か焼け、いやな臭いが鼻を突いた。背後の樹が黒焦げになっているのを見てどっと冷や汗が出た。体制を立て直そうと後ずさる。その時、足の下で木の枝が折れた。ぐらりと姿勢が崩れた。それを襲撃者たちは見逃さなかった。二方面から同時に刃が突き出される。

「オルグラム！」

クロージアの悲痛な声が遠くに聞こえた。煌く白刃が眼前に迫り、俺は死を覚悟した。彼女を助けられなかった。なんて馬鹿なやり方をしたんだろう。死の間際には今までの人生が走馬灯のように頭をよぎると言うが、そんなのは嘘だ。悔恨ばかりが脳裏によぎり、硬く目を閉じた。

しかし、いつまでたっても痛みはやってこなかった。いぶかしんで目を見開くと、そこには倒れた襲撃者と、全部で２０人は居るだろうか、彼らを囲む騎士たちの姿があった。

ー――助かったのか？

呆然とする間に、彼らは連続して魔法を放ち、或いは剣で切りかかり、あっという間に全員をのしてしまった。彼らは人質をとる暇さえ与えなかったのだ。生かして捕ら得よと命じられてあったのか、血すら流していないように見えた。

たった今殺されかけていた自分とのあまりの差に、悔しがる気も起きなかった。それでも何とか気力を奮い起こし、クロージアのもとに駆け寄った。

そこにはすでに先客がいて、彼女を戒める縄を探検で切り裂いていた。

「無事でよかっ・・・」

騎士たちに号令を出していた人物。その顔を見て、俺は言葉を途切らせた。
あのルド公子だ。

「まったく馬鹿な真似をしたものだ」

彼は不機嫌そのものの顔だ。だが、その声は奇妙に満足そうに聞こえて、いぶかしむ。

「なんであなたがここに？」

「助けに来たからに決まっている。この役立たず。勇気と蛮勇をはけ違える貴様の様なやつが見方を危険にさらすのだ」

「やめて、ニール兄様。私を助けてくれようとしたのですわ」
ルド公子に支えられていたクロージアが弱弱しく反論した。

「ニール兄様？」

いったい誰のことだと言いかけて、ルド公子の名がニールであったことに思い当たる。

「私の従兄弟です。助けてくれてありがとうございます。二人ともお願いですから喧嘩などなさらないで」

「クロージア、君が気にする必要は無い。ただ少し彼を叱っておく必要があるだけだよ」

俺は唖然とした。クロージアとルド公子ニールが従兄弟であったこともだが、それよりも、先日クロージアを道具扱いしていた彼が打って変わって優しい声音で彼女に話しかけ、クロージアもまた親愛をこめてニール兄様などと呼んでいることに。

どうなっているんだ。

ルド公子は配下の騎士たちのもとへ行って二言三言話していたが、やがて状況を把握しきれないでいる俺の方に向き直ってじろじろと見つめ、尋ねた。

「駆け落ちするつもりだったのか」

「ああ」

俺は何処から見ても旅姿だった。今更隠すつもりも無く開き直って答えると、ルド公子はそれに対して特に何も返事をせず、今度はクロージアに目を向けた。

「こいつが好きなのか」

俺はその問いにまたしても面食らい、同時に彼女は何と答えるだろうと少々不安に思ったが、それは杞憂に終わった。

「ええ。好きです」

クロージアは簡潔な言葉を返した。この話題は何処へ行くのだろうかと疑問に思っていると、またしても公子がとんでもない無い事を告げてきた。

「おい、オルグラム。彼女はそう長く生きられないだろう。間違えなくお前より先に死ぬぞ。知っていたか？」

「・・・どういうことです」

「『深淵をのぞむ者』にならなければ、時間稼ぎは出来るが、それでもいつかは呼ばれてしまうということだ。精神が去った後の肉体は、長くは持たずに後を追う。それでも側にいたいか」

俺はごくり、と唾を飲んだ。彼女は俺より早く死ぬ。衝撃的な言葉だった。だが、どこかで覚悟していた言葉でもある。彼女が前にそのようなことを匂わせていた。クロージアが死ぬ事を思うとひどく怖い。それでも俺の答えは決まっていた。

「側に居たい。明日別れが来るのでも、それまで一緒に」

「だそうだ。お前の気遣いは不要だと言っただろうクロージア。その一点ではこの馬鹿は正しい」

クロージアは泣きそうな顔になった。その表情に、公子は苛立たしげに眉根を寄せた。それから、いきなりぽんと皮袋を投げつけてきた。手のひらに乗るほどのそれを反射的に受け止めると、中はなにやらずっしりと重い。

「二人で逃げろ」

「え？」

「これは餞別だ。旅費の足しにしろ。族に襲われてクロージアは行方不明ということにする」

「ニール兄様？」

クロージアが戸惑いの声を上げた。

いきなり何を言い出すのだろう。彼は権力のためにクロージアと結婚したいのではなかったのか。二人して顔を見合わせ、どうしたらいいのかと戸惑った。

「どうした、気が変わらないうちに早く行け」

ルド公子は動き出さない俺たちになおも言葉を重ねた。

先に行動を起こしたのは俺のほうだった。彼が本当は何を考えているのは正直よく分からなかったが、見逃してくれるというのならその機会を無駄にすべきではないと思った。

かすかにクロージアの手を握って口を開いた。

「一緒に来てくれますか」

クロージアは俺を見つめ、次いでルド公子のほうへ視線を向け、それからゆっくりとうなずいた。

出産（前書き）

なんかこの小タイトルの時点で恋愛タグからずれてるような・・・
短編のつもりが意外に長くなってます。
そして山場がない・・・・・・

出産

「いきんでください、ほら」

産婆がクロージアに呼びかける。

陣痛の幅はだいぶ狭くなっていた。この世のものとも思えない悲鳴が、閉ざされた扉の向こうから漏れ聞こえてきた。

こんなとき男は無力だ。

お産が始まってからもう半日近くは立つ。もうそろそろ生まれてもいい頃だ。何か良くないのだろうか。もともとクロージアは丈夫なほうではない。焦燥と不安に叫びだしそうになりながら、部屋の前の廊下をひっきりなしに行き来する。彼女はもっと苦しんでいるに違いないのに、こちらが先に耐え切れなくなってしまいそうだった。所在無く窓の外を見やれば、村の明かりが雪の中にかすんでいる。故郷と似て、しかし異なるその光景に過ぎた日々を思い出す。

駆け落ちから3年目の冬を、俺たちはリベルで迎えた。リベルはイリューシン領の南に位置し、俺の故郷からは若干西に当たる。異邦というほどではない。言葉のなまりも民の気風もさして変わらないが、いざ住むとなるとそれなりの苦労はある。特にクロージアはまったくの姫君だ。ようやく住民たちともそれなりに馴染んできたところだった。

あの後、ルド公子が用意してくれた路銀と彼女の身に着けていた宝石、俺のわずかばかりの蓄えを切り崩して生活していたが、やがてそれも底を漬きそうになったとき、偶然アルク伯爵に出会った。

どういうわけか彼はこの訳有りそうな夫婦者に情けをかけてご自分の臣下としてとり立て、小さいながらも荘園を与えてくれたのだ。

不意に歓声が物思いを破った。

「生まれたのか！」

回廊を走り、制止する声をさえぎって扉を開ける。中に踏み込んだ途端、もわっとした血なまぐさい空気に包まれた。血の臭いそのものは戦場や魔物狩りで慣れているはずだが、それとこれとは異なる。不安と期待に急き立てられながら寝台に歩み寄ろうとすると、産婆に鬼のような顔で怒鳴られた。

「出て行いきなさい、まだ終わっていません。邪魔です」

その剣幕に驚いて立ちすくむと、横にいた付き添いの女がぐいと俺の背中を部屋の外へ押し出した。

「お呼びするまで中へ入りませんように」

鼻先でぴしゃりと扉が閉められる。外で待っていた中年の執事が共感の混じった笑みを向けた。

「世の中は何事も経験ですが、お館様。こればかりは男には無理ですから、従う事を覚えるしかございませんよ」

ようやく入室許可が出たのは、それからしばらく後だった。

頑強そうな産婆が、袖を捲り上げた男のような腕で小さな包みを差し出した。

「ここは女の戦場。無断で入ってくるとは何ということ。でも、無関心な夫よりはましですね、その心をお忘れになりませんよう。お館様、おめでとうございます。玉のような男の子です」

俺の息子。

受け取った包みはあまりに軽い。布の塊の中で猿のような赤い顔の生き物がもぞもぞと動いていた。

「あなたと私の子ですわ」

寝台の上のクロージアが微笑む。汗にまみれ、やつれていたが今まで出一番美しかった。

「でかしたぞクロージア。ありがとう」

「さあさ、お乳をやりませんと。坊やを貸して下さい」

「あ、ああ」

声が締めるのをごまかすようにぶっきらぼうに頷く。今まで生きてきた中で、これほど感動したことは無かった。クロージアが好きだといってくれたそのときよりも、さらに世界が輝いていた。赤ん坊はまだ泣くのもおぼつかないのに、クロージアの胸に抱かれるとしっかりと乳首に食いついた。クロージアがそれに自愛に満ちたまなざしを向ける。

幸せの光景。

その様にじっと見入っていると、いつの間にかクロージアが目を閉ざしていた。

「眠ったのか？大変だったからな」

顔にかかった髪を払いのけてやろうとして、彼女が眠っているのではないことに気付いた。

荒い息。それに酷い熱だ。浮ついた心が一瞬にして冷えた。

「どいてください」

産婆が緊迫した声で言った。

「お医者を、すぐに呼んできてください。無駄かもしれませんが」

「何があったんだ。無駄とはどういうことだ？クロージアは大丈夫なのか」

問いかけに産婆は唇を噛んだ。

「奥様は、魔力がありますね。あたくしは魔法を使えないので分かりませんが、おそらく魔力が枯渇していらっしゃるんです。このままでは、危険な状態にあります」

「どうしたらいい？」

「どなたかの魔力を注ぎ込めばあるいは。でも、魔力と言っても皆同じではないのです。合う、合わないがありますから。身内に魔力のある方がいらっしゃればいいのですが」

やってきた医者の診断も同じであった。周囲の者たちは彼らに頼れる親類がいないと知っていて沈痛そうな面持ちだ。が、それは正確には真実ではない。

身内。

イリューシン公爵家は魔導騎士の家柄。おそらく彼女を救えるだろう。行けば彼女は連れ戻され、俺は罰を受けるかもしれない。赤ん坊だってどうなることか。だが、彼女の命には代えられない。俺は素早く結論を出すと、従者に馬を引くように命じた。

結論から言うと、俺はイリューシンまで行く必要は無かった。途中の街道で、またしてもルド公子に出会ったのだ。

「あなたは・・・。どうしてここに？」

「クロージアに用があって来た。お前とここで会うとは思わなかったが。お前こそどうした？」

クロージアに会いにきたとこの男は言った。どうして俺たちの居場所を知っているんだ。疑念が渦巻いたが、あいにく今はそれどころではない。

「イリューシン領に向かう。クロージアが出産して、でも魔力が枯渇したらしい。身内なら魔力を与えられるかもと医者が言っていた」

「クロージアに、子供？」

俺の言葉に公子は衝撃を受けたようで呆然とつぶやく。次いで我に返ると馬に飛び乗った。

「いくぞ。さっさと案内しろ」

「どこへだ」

「私は彼女の従兄妹だと前に行ったはずだ。彼女と私は魔力が「合う」。さっさとするんだ。事は一刻を争う」

彼に言われたくはない。憮然としながらも、魔力が合うという言葉に希望を見出した。

「嘘じゃないだろうな」

「誰がこんなところで嘘をつく」

「分かった。ついて来い」

今はこいつに賭けるしかない。

公子の彼女への用事が何なのか。なぜ彼は居場所を知っていたのか。どうして駆け落ちを手伝ったのか・・・聞きたいことは山のようにあったが、今はとにかくクロージアを助けるのが先だ。俺は馬首を来た道へと向け走り出した。

告白（前書き）

子の話はもともと偶に出てくる魔王と勇者と二人の子供が主役の王道ファンタジー？の設定づくり兼ウォーミングアップとして書いた物です。だからこれだけだと、もうすぐ終わりにもかかわらず盛り上がりに欠けてる気がします。

告白

クロージアは眠っている。

彼女は危機一髪の状況だった。もしイリューシン領前言っていたら間に合わなかったかもしれない。ルド公子は駆けつけるや否や、彼女の胸に両手を当て、なにやら呪文を唱えた。傍目には何がおきているのか分からなかったが、しばらくそうしている内に、クロージアの呼吸は穏やかになり、血色が戻ったのだ。

ルド公子は疲労した顔をしていた。

「彼女を助けてくれて、心から感謝する。かけ落ちを見逃してくれたことに対しても。だが、釈然としないことが多すぎる。ルド公子、あなたはいったい何を考えている？それにクロージアへの用とは何だ」

「ルド公子ではない。公爵になった」

「え、次男じゃなかったのか」

「兄は失脚した。させたと言うべきかも知れんが・・・順番に話そう。私もお前にいろいろと言う事がある」

公子、では無く公爵は椅子を引き寄せて座ると、眠るクロージアの横顔をじっと見つめた。その様子はどこかやるせなく、俺は胸がざわついた。

「あの赤子」

「息子がどうかしたか」

「混沌のかけらを持つ者の魔力はとても強い。クロージアもだ。クロージアの魔力の枯渇のことだが、生まれてくるものの魔力が強いと、たまにそうしたことが起こる。生まれてくる赤子に魔力を全部奪われてしまうためだ。６公家では、そう珍しいことではない。魔力や、『深淵をのぞむ者』の素質は遺伝が強いものなんだ。お前は魔力を持っていないから、あまり心配していなかったんだが――」

「あの子には、魔力があるのか？」

「ああ。とても強い。それにあの子もまた混沌のかけらを持っている」

２

「まさか」

聞き間違えでは無いかと思った。そう出会ってくれと願ったが、公爵は言葉を重ねた。

「あの子の混沌はクロージアほど大きくは無い。自ら望まない限り、完全な狂気に陥る危険はあまり無いはずだ。だが、魔力が暴走すれば、分からん。私は、あの子はこちらで引き取ったほうがいいと思う」

連れて行かせるものか。声を上げようとしたが、その前に寝台からかすれた声が上がった。

「いやよ」

「クロージア？目を覚ましたのか」

「ニール兄様。おいでになったのですね。夢かもと思ったのですが・・・。いやです。あの子は何処へもつれて行かせません。最期まで傍にいたいの」

「クロージア、だがあの子は」

「大丈夫よ。あの子のかけらはそこまで大きくない。母親の私が言うのです。あの子と共にいられる時は、もうそう長くは無いのですから」

ルド公爵は一瞬絶句し、苦く笑った。

「分かってたのか？クロージア――――承知した。だがその代わりイリューシンから人をよこす。魔力の制御を教えなければならない」

「先が長くないなどと、めったな事を言うな。それに、あの子を魔法と関わらせるつもりは無い」

「冗談ではない。あの子を殺したくなければ最低限の制御は必要だ。私は君たちの幸せを望んでいるが、せめて魔法をある程度使える乳母をつけろ。これはゆずれない。それでなければ今すぐ二人を連れて行く。彼女は理解しているはずだ」

「ええ。オルグラム。ニール兄様の話を聞いて」

クロージアの静かな声に、心臓が鷲掴みにされた気がした。低くうなるように言う。

「お前を信用できるかは、俺の疑問に答えてから決める。話せ」

「ああ。そのつもりだよ。お前はきっと怒るだろうね」

ルド公爵は足を組みなおして話し出した。

「私とクロージアは従兄妹関係で、小さい頃からよく行き来があった。彼女は昔から深淵に惹きつけられていて、それにおびえていた。それが酷くなったのは、魔王が現れた頃からだ。理が乱れて、彼女の感覚をかき乱していた。・・・彼女は、いずれ気が狂うなら自ら混沌にもぐって、「勇者」の手がかりを探したいと言った。私たちは止めた。何も君がやることは無い、『深淵をのぞむ者』もその候補者も沢山いるのだからと。だけど、彼女は頑固だった。使命感もあるけれど、それよりも狂気におびえて、早く楽になりたいと思っていたように見えた。

そんなとき、厄介な事態が持ち上がったんだ。

『深淵をのぞむ者』は予言や遠見をするが、何でも好きなものを見られるわけではない。混沌の海で欲しい情報を得る能力には個人差がある。その能力は、大体魔力が大きいほど高い。

それで、国王が勇者を探すため、イリューシン公爵家の姫を差し出すようにという話が持ち上がりかけた。

本当に国のためなら、公爵は従ったかもしれないな・・・。

でも、はっきり言ってその時点では無意味なことだった。空気中の魔力素の動きを観測していた神官たちは、まだ「勇者」は現れていないと言っていた。『深淵をのぞむ者』達も同意見だった。王がクロージアを求めたのは、求心力が衰えた王家にイリューシンが背

かないための人質とするためにすぎない。それで、公爵は私に彼女と婚約するように頼んだ。ルドとイリューシン二つを敵に回すのは、今の王家には分が悪いからね。
彼はたぶん、幼馴染の私に彼女をつなぎとめて欲しいとも思っていたのだろうが。私にはそちらの役は無理だった。

お前とクロージアの関係については、クロージア本人の口から聞いた。彼女はお前に説教されたといっていたな。それで、私とイリューシン公爵は一計を案じることにした。不本意なことだがお前ならクロージアが『深淵をのぞむ者』になるのをとめられるのではないかと思ってな。
だが、二人とも一向に動かないから、背中を押すことにしたんだ」

「あの呼び出しのことか？」

「あれはちょっとした挑発だ。見事に乗ってくれたけどね。二人で計画したのは、誘拐事件のほうだ」

「なんだって？」

「落ち着け。あれは演技だった。そのままお前が駆け落ちに誘ったところで、クロージアが思い切るとは思えなかったためと、目くらましだな」

言われてみれば確かに、あの誘拐騒ぎは不自然なことが多かった。

何で気付かなかったのか不思議なほどに。俺が離宮に行った、ちょうどそのときに起きた都合のよさ。あまりにあっさりと誘拐犯が倒されたこと。ルド公子が駆けつける頃合まで、まるで芝居の一幕だ。

「実家はイリューシンとのより強い結びつきを求めていた。それをあきらさせるためと、王家に真相を隠すためだな。クロージアの平穏を守るには、賊に襲われて死んだと見せかけるのが一番だった。

それから最期に、私個人の事情もある。兄は邪教にのめりこんでいてな、いろいろ悪さをしていたが証拠が無かった。それを用意するのにうってつけだったんだ。誘拐犯の着ていた黒装束は奴が信奉している教団のものだ。妹の婚約者に横恋慕した挙句誘拐を図り、手違いから殺してしまった、ということで兄は失脚し、私が公爵になった。イリューシンとしても、兄より親交の深い私が立つ事を望んで支持した」

「――――まさか、この荘園も？」

「気付いたか。ああ。アルク伯爵にはお力添えを乞うたよ。居場所を知っているのはそのせいだ。最も彼はお前たちの事情については知らないがね。今までのこととしては、大体こんなところだろう」

俺は愕然としていた。今までのことは全部掌の上だったのだ。まるで道化だ。俺は泣きたいよう、な笑いたいようなどうしようもない気分になった。でも、まだ話は済んでいない。

「それでクロージアのこととは？」

「ああ。ここから先はクロージア、君の話だ。君はさっき分かっているといったね」

「ええ。深淵が騒いでいます。殿下のことを知ったときから、ある程度の覚悟はしておりました」

「そうか。あの時は確かにクロージアが『深淵をのぞむ者』となることには何の意味もなかった。だが・・・オルグラムも新たな勇者が生まれたことは知っているか？」

「もちろんだ。王女殿下だろう。これでやっと魔王を倒せると国中が大騒ぎだ」

「その彼女が今行方不明だ」

部屋の中の空気が凍った。

「『深淵をのぞむ者』の能力は魔力と、もうひとつ血に依存するものだ。近しい人間の事ほど探りやすい。古来すぐれた予言の巫女だの巫だのに王族が多いのも、家族のこと―――つまり国王に関する予知や遠見をしやすかったためだ。今回、そのお鉢はクロージアに

めぐってきた。イリューシンは王家と血が近いからな」

「だって、彼女は死んだことになっていると」

「そういうことになっているだけですわ」

「クロージア、何を」

「お前も貴族の端くれだろう。国難において、取れる手立てがあるのに傍観することは許されない。我らはこの国の貴族の要たる6公爵家の人間として為すべきことを為す。彼女もそれは理解している」

「どうかわかってください。でもニール兄様、ひとつだけ。私、あの子と別れたくないのです。だんだんと正気を失っていくのは仕方ありませんが、ぎりぎりまで成長を見守りたい。どうにかなりませんか」

「・・・我が家の傍系に一人『深淵をのぞむ者』がいる。表向き、彼女の託宣として王家に報告しよう。神殿は金をつかませれば何とでもなる。殿下を見つけた後はこの地に帰ればいい。残された時間はそう長くはないだろうが――――すまない」

「兄様が謝る事ではありませんわ。ニール兄様は私のわがままを聞

いてくれたのに」

「連れて行くな。魔王が何だというんだ。勇者なら、自力で何とかするさ」

俺は反論したが、その言葉は力なく宙に溶けた。どうにもならないのだ。ただ、自分では関与することの出来ない中枢部の事情で、俺たちの人生が振り回されている。それが酷く悔しかった。こぶしを握り締める俺の肩に公爵がぽんと手を乗せて耳元にささやいた。

「私も彼女を愛していた。・・・・・・そうは見えないだろうけどね」

俺は何も答えられなかった。

告白（後書き）

主人公、狂言回しと化してます。

深淵をのぞむ者（前書き）

今回で終わりです。と言うか、これを複線に長編を書きたいな・・・
と思ってるんですが、どうなることやら。

深淵をのぞむ者

彼女は産後の疲労が収まるのを待って旅立ち、一年後に戻ってきた。

その間レイディアス＝リシェリア・ファン・オリアンと名づけられた息子は乳母と、イリューシンから連れてこられた侍女に育てられた。魔力が暴走したり、己の魔力で自家中毒を起こしたりしてはいけないからと半ば無理矢理付けられた女だ。

だが、俺にはレイディアスに「制御」以上の魔法を扱わせる気はなかった。権力や国家に踊らされたクロージアと己を見るにつけ、そうしたものとは関わりなく育てたいと思ったからだ。俺にとって魔法は、『深淵をのぞむ者』とイリューシン公など上位貴族の象徴であり、忌避するべきものだったのだ。レイディアスを魔法に近づけたら――――もっと言えばイリューシンに近づけたら、奪われてしまいそうで恐ろしかった。

＊　＊　＊

クロージアは、予告どおり次第に正気を失っていった。

戻ってきた当初、彼女はまだ普通に会話することが出来た。話している最中に突然ぼうっとしてしまうことは前よりも格段に増えていたが、現実と混沌のささやきとの区別はついていた。よくレイディアスを抱き上げ、歌を口ずさんで笑っていた。俺は正気を失う打なんて話は杞憂だったのだと安心しかけた。

しかし、その状態は数年しか持たなかった。次第次第に彼女の精神は混沌の中に囚われ始めた。深淵の歌や混沌の海が映し出す幻視を現のものと捉え、混乱して叫びだすかと思えば、糸の切れた人形のように何の反応も示さなくなったりした。狂気はゆっくりと、しかし確実にクロージアを絡めとった。

それでも、俺とレイディアスのことは判るようで、特にレイディアスが歌うのを正気に戻ったときの彼女は楽しそうに聞いていた。

クロージアはその頃から、裏庭でよく剣舞を舞うようになった。俺の使う諸刃で真っ直ぐの剣とは違う、片刃のわずかに反り返った剣に魔法を乗せて踊るのだ。神に捧げる魔導騎士たちの神舞。彼女はそれをレイディアスにも教えようとした。最初それを、俺は微笑ましく見守ろうとした。魔法は嫌いだが、おもちゃの剣を持った小さな息子がおぼつかない足取りで母親の真似をするさまはかわいらしかった。

だが、そのうち二人が音楽もないのに拍子を合わせて動くのを不思議に思うようになった。ある日そのことを尋ねてみると、レイディアスは無邪気ににこりと微笑んだ。

「父上には聞こえないのですか。世界が歌うのにあわせているので

す。母上は、しんえんのうたというのだと言っていました」

その時を境に、俺はレイディアスが舞うのを堅く禁じた。

俺は心底恐ろしかった。クロージアだけでなくレイディアスまで奪われてしまったらどうしたらいいのか。その恐れのままに息子が魔法に触れるのをこれまで以上に拒み、片刃の剣を取り上げ自分の使うような諸刃の騎士剣を使うようにさせた。物語で魔法使いや『深淵をのぞむ者』に興味を持てば、書物そのものを取り上げた。そのたびにレイディアスは、俺の事を傷ついたような、反抗するような瞳で見上げていた。

そんな顔をするな、どうして分かってくれないのだろう。だんだんと距離を置くようになる息子に俺はますます焦り、魔法から遠い「騎士」に育てようと躍起になった。悪循環だとは分かっていても、どうにもならなかったのだ。

＊　＊　＊

その日、クロージアは珍しく俺を認識していた。近頃ではほとんど一日中窓辺にもたれているか、寝台に横たわっているばかりで、話しかけてもうつろな視線をさ迷わせるばかりだったのだ。

「ねえ、たぶんこれが最後だわ」

その言葉は穏やかで、ここ数年の狂気など欠片も感じさせないものだった。驚きつつ振り返ると、クロージアは午後の日差しに銀の髪を煌かせながら微笑んでいた。

「最後？」

「ええ。こうして正気に戻れるのはこれがきっと最後。私、ずっとあなたに謝らなくてはと思っていたのです。父やニール兄様に仕組まれたこと、あなた恨んでいたでしょう」

確かに俺は、彼らの「尽力」がなければクロージアと添い遂げることはできなかった事を認めながらも、知らぬ間に他人の手で踊らされていた事を腹立たしく、そして虚しく感じていた。そして、彼女をやむにやまれぬ事情があるとはいえ『深淵をのぞむ者』としたことに対し、やり場のない思いを抱いてはいた。

だが、駆け落ちについては、仮に彼らが手を出さなかったとしても、いつか俺はクロージアをつれて逃げていたようにも思う。だから、そのことでクロージアを恨んだ事はない。むしろ苦労をさせたと、こちらが謝りたかった。

そう告げると、クロージアは首を振った。

「違うわ。彼らが仕組まなかったら、そして何より、私が拒めていたら、あなたの人生を狂わせてしまうようなことにはなりませんでした。あなたを私の狂気の巻き添えにしてしまった・・・」

「そんな風に考えたことはない。俺はあなたを愛している。限られた時間でも、その先に何があろうとも、傍にいたいと思ったのは俺の勝手だ」

「それでも、私たちが寄って集ってあなたの人生を捻じ曲げた事実は変わりませんわ。それでも、私後悔していないのです。自分勝手でしょう？　あなたに苦労をかけて、つらい思いをさせていると分かっているのに、あなたが私のために泣いてくださると思うと、とても幸せです」

「俺も、幸せだ。後悔なんてしてない」

彼女の言葉に、本当にこれが最後の会話なのかもしれないと言う予感を強くしながら、俺は続けた。

「愛してる。この世の誰よりも。永遠に大好きだ」

普段なら気恥ずかしさを感じそうなその台詞は、別れを強調して酷く悲痛に響いた。けれどそれは泣き叫んだりするような激しいもの

ではなく、満ちてくる潮のような、暮れ行く黄昏のような、静かで穏やかで自然な哀しみだった。

「今まで散々世話をかけて、死ぬ前にまでお願いだなんて酷い女ですが、レイディアスの事をお願いします。あの子には、きっと過酷な運命が待っている・・・何があっても守ってやってください」

「あなたは何かを見たのか」

「ええおぼろげにですが。宮殿で血を流しているのを見ました。運命はまだ確定してはいません。あの子を宮殿に近づけないで」

母親に良く似たレイディアスのことを思い出した。おとなしく、引っ込み思案な息子。あの子が血を流す様など信じられない。しかし、あの子の目は公爵に似ている。祖父たるあの冷徹なイリューシン公爵―――。たとえ本人にうらまれることがあったとしても、襲い掛かるどんな悪意からもあの子を守ってやらなくてはならない。

「分かった。約束しよう」

俺は彼女にしっかりと頷いて見せた。クロージアがほっとしたように微笑む。

「空が見たいのです、連れ出してもらえますか」

俺は彼女を抱き上げて、俺は露台に立った。

彼女と暮らした土地。息子の生まれ故郷。

遠く潮風の香る恵み深き大地を黄金に染め上げて、太陽が木々の狭間で最後のきらめきを放ちながらゆっくりと沈んで行く。

俺たちはその様をじっと見ていた。

やがて日が山並みの影に隠れ、最後の残照がクロージアの髪を赤く染めた。

ああ、彼女と共に、俺の心の一部も混沌の海に沈むのだな、とその時思った。

部屋に戻ったとき、すでに彼女の瞳は光を失っていた。心臓は動いていたし、呼吸も静かだったが、俺にはすでに彼女の魂は夕日と共に混沌の海に還ってしまったのがわかった。

いつの間にか傍らに息子が立っていた。

「母上は、逝ってしまいました」

「そうだな」

「父上にも、深淵の声が聞こえたのですか」

俺には深淵の歌など聞こえない。わかるのは、俺の心の一部が持っていかれてしまったからだ。胸の隙間にすうすうと冷たい風が抜けている。

「魔力がなくても、愛していればそれくらいはわかる」

レイディアスがそっと俺の腕をつかんだ。日ごろの不仲などおいて、二人はただじっと寄り添いあっていた、

やがて、静かにすすり泣く声が上がった。

彼女の肉体は、それから7日後に後を追った。

〈完〉

深淵をのぞむ者（後書き）

お付き合いくださった方、ありがとうございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0038ba/

深淵の追悼歌

2011年12月31日01時45分発行